IATSS三十周年によせて

交通社会学の試み－20年間にできたこと

鈴木春男　自由学園最高学部長・千葉大学名誉教授

1962年東京大学文学部社会学科卒。65年同大学院社会学研究科博士課程中退後、東京大学文学部助手。千葉大学専任講師、助教授を経て83年文学部教授。2003年千葉大学退官後、自由学園最高学部長。千葉大学名誉教授。(財)国際交通安全学会では79年会員、顧問を経て2003年理事。

国際交通安全学会設立十周年の記念出版物「人間・交通・安全1984」で、私は今回と同じ「交通社会学の試み」というタイトルで短文を書いた。当時は（今もかもしれないが）交通問題を社会学の観点から分析する研究者は少なく、私も40代半ばと若かったので、そこでは専門科学としての交通社会学確立のために、もし交通の諸問題を社会学的に究明するとしたら、どんなテーマが考えられるかを自分で研究したい気持ちも含めて15に絞って挙げている。それから20年の歳月が流れ、こうして三十周年の記念出版物に拙文を書くに当たって、「20年間にできたこと」という副題をつけ、自分への反省も含めて何ができたかをふり返ってみたい。

20年前に提案されているテーマは次の15である。(1)全体社会と交通の関わりの究明（社会変動を交通という要因を中心に検討する）、(2)都市と交通（現代都市の抱えている交通問題を、都市住民の生活時間、生活スタイル、生活意識など生活構造の問題としてとらえる）、(3)社会的移動と交通（交通は物理的な移動だけでなく、世代内・世代間の職業移動など階層移動を中心とした社会的移動にも重大な影響を与えている）、(4)ライフスタイルと交通（ライフスタイルは交通の影響を多分に受けている。またライフサイクルステージと交通は高齢者問題を取り上げるまでもなく、非常に関係が深い）、(5)交通の発達と生活構造の変化（生活構造の変化を交通との関わりの変化から見ていく）、(6)余暇問題と交通（余暇と交通との関わり。運転行為の遊び性）、(7)文化と交通（交通の発達は文明の伝播には大いに役立ったが、逆に文化の崩壊をもたらしてはいないか）、(8)交通と国民性（交通の発達で国民性はどう変化するか、国民性の違いが交通にどんな影響を与えるか）、(9)交通コミュニケーションシステム（ドライバー同士の情報交換など人間的な交通コミュニケーションシステムの研究）、(10)車両内での人間関係（人間同士の諸関係が車両内ではどう保たれ、役割はどう分担されているのか、それと安全との関係）、(11)交通関連の職業の分析（交通に関連する職業従事者の意識や行動、職場環境などを分析して安全に役立てる）、(12)社会福祉と交通（身体障害者にとって福祉車両は社会参加の場を与える、福祉の問題を交通との関わりで捉える）、(13)犯罪と交通（交通事故だけでなく、交通は犯罪と深く関わる）、(14)交通をめぐる社会運動（排気ガス反対運動や消費者運動など車をめぐる社会運動と交通の関係）、(15)マス・コミと交通（キャンペーンも含め、マス・コミが交通問題をどう取り上げ、どう取り組むか、それが社会に与える影響）。

さて、15のテーマのうち私自身が論文を書いたり国際交通安全学会のプロジェクトで取り上げたものは、(2)(4)(5)(6)(9)(12)(13)などのテーマである。なかでも(2)と(5)は「ヒヤリ地図づくり」として結実したし、(4)は世代間連携をもとにした交通安全教育として成果が生み出されつつある。また(9)は現在H631プロジェクト（プロジェクトリーダー古川修先生）として進行中である。次に、(1)、(7)、(11)、(14)については私自身の手ではないが研究成果が表れてきているように思う。そうなると、ほとんど手がつけられていないのは、(3)、(8)、(10)、(15)である。それを私の手でとか、さらにこんなテーマがあると言えないのが残念であるが、現在の興味から言えばせめて(10)車両内での人間関係については、研究を深めたいと念じている。